

令和8年度 備中県民局 地域づくり推進賞（局長表彰） 受賞者一覧

	団体名	取組概要
1	いせき りゅうへい 井関 竜平 (笠岡市)	○クラフトビールを通じた地域交流の促進 ・平成 28 年度に地域おこし協力隊として笠岡市六島に孫ターンした井関竜平氏（大阪府出身）が、島内で麦の栽培を行い、県内醸造所の協力により六島産の麦を原料としたクラフトビール「麦のはじまり」を完成させた。その後自身もビール製造手法を学び、令和元年に島内の古民家を改装した「六島浜醸造所」を設立。 ・島外から六島浜醸造所ファンが訪れる際には、醸造所前の波止場のドラム缶に地元住民が集まる通称「ドラム缶会議」で島民との交流を創出している他、笠岡地域の特産品を活用したクラフトビールの開発を積極的に行い、クラフトビールを契機とした笠岡市のにぎわい創出イベントや地域貢献活動を精力的に展開し、六島浜醸造所が関わる地域の魅力発信や地域と地域の交流促進にも寄与している。
2	こうえきしゃだんほうじん くらしきほうじん 公益社団法人 倉敷法人 かいじょせいぶかい 会女性部会 (倉敷市)	○「絵はがきコンクール」による税の啓発活動 ・税に関する作品づくりを通じて、税に関心を持ち、正しい理解を深めてもらうことを目的とし、小学6年生の児童を対象に税に関する絵はがきを募集して、優秀作品の表彰を行っている。 ・これにより、税金の仕組みや税が日常生活の中でどのように役立っているのかなどについて知ること、税の意義や役割を正しく理解し、税金を納めることと税の使い道に関心を持つことができ、社会や国の在り方を主体的に考える自覚を育むことになるきっかけとなっている。
3	がんこじいさんの会 (新見市)	○男性だけの通いの場 満 20 年！ ・男性が集まるサロンがないことから、H18 年に新見市正田地区の男性を中心に「がんこじいさんの会」を発足。「第2の人生を地域の仲間たちと生き生き楽しく過ごそう」を目標に、月1回集まり、地域の奉仕活動、地域交流、料理教室や社会見学など多彩な活動を行っている。 ・令和7年10月現在の参加者の平均年齢は78歳で、60歳から92歳まで幅広い年代が参加している。集まった後に必ず飲み会を開き、メンバー同士が交流することで、後継者が育ち息の長い活動が続いている。 ・通いの場等への男性の参加率が低いことがどこの市町村においても課題になっているなかで、「がんこじいさんの会」は男性が集まって交流するヒントがたくさん詰まっており、たびたび新聞やテレビに活動の様子が取り上げられている。また子どもや大学生との交流も積極的に行い、若い世代へ地域の良いところを伝えている。 ・R7年度には、県主催の「介護予防交流フォーラム」において活動発表し、他の団体の模範となっている。

4	いばらしんのうぎょうけいえいしゃ 井原市新農業経営者 クラブ 礎会 (井原市)	○井原ぶどう産地での若手農業者による多面的な地域貢献活動 ・井原市新農業経営者クラブ礎会は、県下有数のぶどう産地である井原市青野地区の地元農業後継者を中心に、「農業及び生活技術の研修と豊かな人間性を養いもって地域社会に裨益すること」を目的に掲げ、昭和 47 年に設立。 ・現在は、地域外からの新規就農者を中心に構成されているが、発足当初の意志を継ぎ、地域農業の維持や次世代の人材育成、地域の活性化支援など多面的活動を半世紀に渡って継続しつつ、移住就農者が地域に定着するための重要な拠り所にもなっている。 ・農業者の減少や農地の維持が喫緊の課題となる中で、高齢農家の営農継続支援や過去 10 年間で 10 人以上の新規就農者確保・定着に関わっており、地域の主要農産物であるぶどう生産の維持・発展とともに、薬用しゃくやく試作、鳥獣害防止のための狩猟免許取得・狩猟活動などに加え、令和 5 年度から、ぶどう産地の水源である青野ダム周辺の草刈り活動を始めるなど、耕作放棄地の発生防止や農地保全に大きく貢献している。 ・地元農家による食育活動を引き継ぐ形で、地元の幼稚園や小学校でのぶどう栽培体験を支援し、園児や児童が地域農産物への愛着や関心を持つきっかけづくりに取り組んでいる。 ・ブランド化による知名度向上、次世代の育成、生産基盤の維持や水源の環境保全など多面的な活動を展開することで、地域産業の 1 つである農業に関連する地域の魅力向上に寄与しており、将来に渡って地域農業を支える重要な組織となっている。
5	ふじた いずみ 藤田 泉 (高梁市)	○伝統の茶畑を守り抜く～紅茶栽培への挑戦がもたらした里山再生～ ・地域で栽培されている緑茶用品種「やぶきた」の茶葉を使った紅茶の加工に取り組み、試行錯誤を重ねた末に、高梁市の新たな特産品となった「高梁紅茶」を完成させた。 ・平成 20 年までは、年間製造量 40kg の紅茶製造にとどまっていたが、令和 7 年には 350kg まで製造を拡大。平成 22 年から藤田氏が製造・販売を一手に引き受け、量産できる体制を整えたことで一番茶から三番茶までの各時期に「高梁紅茶」の製造が可能となり、茶葉の利用用途が拡大した。 ・平成 25 年に「高梁紅茶」が「備中高梁ぶらんど」に認定され、市の観光施策の一端を担うとともに、福祉施設と協力し、新商品の開発、販売を進めた。 ・「高梁紅茶」ブランド確立による地域貢献のみならず、「高梁地紅茶まつり」や茶摘み体験等の交流イベントを自ら主宰するなど、「高梁紅茶」のイベント等を通じた地域おこしや交流人口の増加にも寄与し、中山間地域の活性化の一翼を担っている。